

欲集郷兵与灶夫 破倭重作海防図

威王范蔡猶堪式 釋甲帰田更服儒

四公収士兵灶丁 破倭立切 各有專著行世

(一九九〇年六月、中山大学出版社、A五判四二二頁)

付記 本書は五〇〇部しか刊刻されていないので、日本

には殆ど入荷していないようである。

侯燦著

高昌楼蘭研究論集

伊 藤 敏 雄
關 尾 史 郎

(一)

トゥルファン(高昌)と楼蘭とは、いずれも新疆維吾爾自治区の代表的な遺跡の所在地だが、一九八〇年代は期せずして両遺跡とその出土文物の調査・研究史にとって画期

批評と紹介 伊藤・關尾

となった一〇年間であったといえよう。まず前者に関して、アスターナ、カラホージャ兩地区の古墓群から一九五九年以降出土した漢文文書を整理・編集した『吐魯番出土文書』の刊行が一九八一年から開始され、それをうけてトゥルファン文書研究が中国はもとより、わが国においても短期間のうちに急速な進展をみせた。後者に関しては、一九七九年の予備調査をうけて一九八〇年に中国の学界が初めて本格的な調査に着手し、一九八八年にはその報告が『文物』誌上に発表されるとともに、遺跡がわが国の研究者にも公開されるに至った。

このような成果の背景には、現地新疆の考古・歴史研究者の精力的な活躍があったわけだが、そのなかでも本書の著者侯燦氏(現・新疆師範大学歴史系)は、新疆社会科学院考古研究所(現・新疆文物考古研究所)のスタッフとして、同時に両遺跡とその出土文物の調査・研究に従事した数少ない研究者のひとりである。本書はこのような著者の一九八〇年代の成果をもって編まれた論文集である。かかる論文集が、これまた現地の新疆人民出版社から公刊されたことを、かねてより著者の成果に学んできたものとして、心から慶びたい。また本書の出版に際しては、わが国の西谷正氏(九州大学文学部)を通じて助成が行なわれ、本書の日本語版の出版も予定されているという。したがっ

て本書は中国と日本の学術交流の成果でもあるわけで、この点についても西谷氏をはじめとする関係者各位に敬意を表したいと思う。

本書は、高昌に関する十二篇と楼蘭に関する七篇の計十九篇の論稿（一部、調査報告や動向を含む）を中心として、冒頭には自序、末尾には著者の一九八〇年以降の論著目録が配されているほか、豊富な図版が附されている。現地新疆における調査・研究の現状を紹介することにもなると考え、本書を紹介しつつ、私見を述べることにした。ただし、以下高昌に関する部分（二）を關尾が、楼蘭に関する部分（三）を伊藤がそれぞれ担当し、（一）と（四）については、両者の責任において執筆した。

(一)

高昌に関する論稿は次のとおりである（括弧内は初出年）。

- ① 麴氏高昌王国官制研究（一九八四年）
- ② 麴氏高昌王国郡県城考述（一九八六年）
- ③ 新発現の高昌王闕首帰和麴嘉年号考（一九八四年）
- ④ 高昌主客長史陰尚□造寺碑（一九八八年、改題）
- ⑤ 大凉且渠封戴墓表考釈（一九八六年）
- ⑥ 西晋至北朝前期高昌地区奉行年号探討（一九八二

年）

- ⑦ 晋至北朝前期高昌奉行年号証補（一九八八年）
 - ⑧ 升平十一年王念亮駝契及其説明的歴史問題（一九八二年）
 - ⑨ 高昌章和十三年朱阿定妻楊氏墓表出土時間、地点与有關問題補論（一九八七年）
 - ⑩ 漢晋時期的西域戊己校尉（一九八三年）
 - ⑪ 吐魯番晋—唐古墓出土随葬衣物疏綜考（一九八八年）
 - ⑫ 吐魯番学与吐魯番考古研究概述（一九八七年）
- 自序において著者はこの十二篇の論稿を、時間を論じたもの（③・⑥・⑦）、空間を論じたもの（②・⑤・⑩・⑪）と、それ以外（①・⑫）に大別しているが、ここでは各論稿の性格や内容から、④出土文物にみえる元号を西暦に比定し、さらにトゥルフアンで用いられた元号を復元せんとしたものの（③・⑥・⑦）、⑤特定の文物を紹介もしくはその史料的な価値を論じたもの（④・⑤・⑧・⑨）、⑥aとbをふまえて特定の問題を考察したもの（①・②・⑩・⑪）、および④学界動向（⑫）に分け、以下、aからcについて、この順序にしたがって紹介しつつ、私見を述べてゆくことにしたい。
- ③は、著者が早くから精力を注いだ分野であって、本書

収録の三篇以外にも、「北涼祿永年号考」(一九八一年)、「前凉年号新考辨」(一九八二年)、および「四一六世紀高昌奉行年号再探」(一九八九年、ただし内容は⑦と全く同じ)などがあり、本書収録分のうち、⑤や⑧でも一部この問題に対する言及がある。トゥルファンから出土した各種の文物には、編纂史料からは全く知ることのできなかった元号や、存在は知られていても、トゥルファンで用いられていたとは考えがたい元号が記されている例が少なくない。したがってこれらの文物を史料とする際には、その元号の西暦への比定がまずもってなされなければならないが、幸いなことにこれらの元号は多くの場合干支が併記されているので、この作業はそれほど困難なことではない。このような条件に助けられて著者は、四世紀初頭から六世紀初頭に至るまでの二世紀の間にトゥルファンで用いられていた元号を⑥と③において確定し、ついで⑦では最新の出土文物や、隣接する甘肅省で出土した文物などによって自説を補強する²²。前凉がごく一時期を除いて西晋や東晋の元号を奉用していたことや、建初、承平、および義熙といった元号が従来知られていた五世紀前半以外にも、五世紀末期から六世紀初頭にかけて用いられていたことなどを明らかにしたのは著者の功績に属するであろう。

号については、消去法によって編纂史料の空白時期に比定されているが、推測の域を出ていないように思う。方法的にも当該の文物の形態や様式に対する検討が先行されるべきではないだろうか(干支を併記しないという様式自体、ある一時期にのみ顕著な様式なのであり、西暦への比定に際しては大まかな目安ともなる)。と同時に、元号がそれを制定・使用した政治勢力の意図や立場を端的に表現するものであれば、それぞれの元号が用いられていた必然性を当該時代のトゥルファンをめぐる政治・社会状況から検証する作業も不可欠であろう。さらにまた偽元号である可能性や単なる誤記である可能性をすてきれないものもある。元号の問題は西暦への比定にとどまらず、トゥルファンをめぐる当時の錯綜した国際関係を説明する有力な手がかりになることを思えば、なお今後に残された課題もけつして小さくないと言えよう。

④の四篇は表題にある文物に対する紹介をかねた考察で、いずれも短文。このうち⑨は、吐魯番地区文管所の積読に対する批判を含む。また④は明記されているように、池田温「高昌三碑略考」(一九八五年)を通じての紹介であり、⑤は一切断り書きを欠くが、白須淨眞・萩信雄「高昌墓塚考釈」(二〇一九七九年)の4の記述と多くの部分が一致しており、理解に苦しむ。

④と⑤をふまえたかたちの⑥は、最大の頁数をほこっているばかりか、①と②が冒頭に配されていることからわかるように、著者の高昌Ⅱトゥルファン出土文物の研究の核心であり、到達点でもある。四篇を時代を追ってみてゆくと、まず⑩では、高昌郡建置以前のトゥルファンの状況について、歴代の中国王朝が置いた戊巳校尉の治所と職掌を中心に述べる。十二篇中、唯一編纂史料に全面的に依拠して前高昌郡・高昌国時代を論じた論稿だが、トゥルファンにおける地域社会がいかなる発展・成長を遂げ、その結果高昌郡が成立したのか、という視点はみられない。⑪は高昌郡建置後、唐西州時代までの経済や文化に関わる様々な問題に、随葬衣物疏の様式や内容の分析から迫ったものである。著者によれば、高昌国時代の衣物疏からは、仏教信仰の浸透や中国式の服飾文化、そして貨幣経済の盛行などをうかがうことができるという。その高昌国の支配制度を膨大な量にのぼる出土文物から再現してみせたのが、①と②であり、とくに①では⑩と正反対に編纂史料をしりぞけ、出土文物のみを用いて官制の復元に挑戦しており、ここに著者の真骨頂をみる思いがする。結論として、高昌国の官制には同時代の中国王朝の模倣（軍官Ⅱ將軍号）、秦漢以来の中国王朝の繼承（中央官制、郡県制、および九品制）、そして高昌国の独自性（綰曹郎中、門下校郎ほか）

の三つの要素、なかんづく模倣と繼承が混在していること、歴代の高昌王は中国王朝や遊牧勢力から称号を授けられており、その称号は高昌国の国際的な位置を示していること、および九品官制のうち第一級の官は王族麴氏の、第二級と第三級は麴氏とその姻族張氏の独占にかかり、第四級や第五級もこの両氏と姻戚関係にあった名族の出身者によつて占められていたことなどが提示されている。また②では、高昌国の前期には合計十四にすぎなかった郡・県・城が、その末期には二十六（郡四、県十三、城九）にまで増加したことを明らかにする。

③に分類される論稿の多くは、中国におけるトゥルファン出土文物研究の到達点を示しているが、それはまた限界点でもある。例えば①だが、官職名や行政单位名称が中国的な名称を有しているのは高昌国が漢族を支配者としていた以上ある程度までは当然なのであって、問題はその名称の背後にひそんでいるところの実体いかんであると思うからである。高昌国では下級の將軍が門下系の官員に準じた職掌をもっていたことや、郡と県に統属関係がなかったこと（これは②にも関わってくる^③）など、著者はどのように考えるのだろうか、知りたいところである。官制に顕現する中国王朝との共通性や特殊性に対しても、高昌国が置かれた国際的な位置が明らかにされてはじめて説得的な解答を

出すことができるのではないだろうか。逆説的になるが、トウルファン出土文物を史料としてより有効に利用するために必要なのは、トウルファンからその外部に視野を拡大することであると、評者は考えている。

(三)

樓蘭に関する論稿は次のとおりである。

- ⑬ 論樓蘭城的發展及其衰廢（一九八四年、増補⁽⁴⁾）
- ⑭ 樓蘭新發現木簡紙文書考釈（一九八八年、改題）
- ⑮ 樓蘭出土麋子、大麦及珍貴的小麥花（一九八五年）
- ⑯ 李柏文書出土于LK說（一九八四年）
- ⑰ 樓蘭考古紀實（一九八六年、改題）
- ⑱ 樓蘭古城址調查与試掘簡報（一九八八年）
- ⑲ 樓蘭城郊古墓群發掘簡報（一九八八年）

自序において著者はこの七篇を、樓蘭の「謎」に関する研究（⑬・⑭・⑯）、一九八〇年四月の調査と發掘に関する簡報（⑮・⑲）と考古報道（⑰）に大別している。ここでは、論稿の性格から、調査と發掘に関するもの（⑰・⑱・⑲・⑮）と、その成果を踏まえた研究（⑬・⑭・⑮）に分け、この順番で論稿を紹介しつつ、私見を述べてゆくことにしたい。

著者は一九七九年十一月の予備調査と一九八〇年四月の

本調査に参加し、中心的役割を果たした（後者では西隊隊長）。⑰は一九八〇年四月の調査について、感動を交えながら西隊の活動経過と主な成果の概要を述べ⁽⁵⁾る。その調査と發掘の成果は、本書収録の論稿以外にも、「樓蘭遺跡考察簡報」（一九八一年、⑳とする）、「樓蘭考古」（一九八三年）などに發表されているが、⑱・⑲は新疆樓蘭考古隊の名で『文物』誌上に發表された公式の簡報である。⑱は、新たに標定した故城の位置（北緯四〇度二九分五五秒、東經八九度五五分二二秒）や規模（東三三・五米、南三二・九米、西・北各三七米）、城壁の構造、城内を西北角から東南角へ横切る古水路、仏塔・三間房・住居址など城内の遺跡、東北郊外の仏塔、西北郊外の烽燧台などのほか、種々の出土品について報告⁽⁶⁾。四方の城壁は何度かに分けて造られ、三間房西の大宅院の建築は炭素14による測定値（865±80年、1950年起算、以下同様）により後漢前期に遡り得、仏塔はそれより遅いことなどを指摘するとともに、故城周辺は有史以前から人類の集居地点であり、現存の故城の最後の形態は魏晉期に形成され、自然環境の変化により衰廢し、その廢棄は前涼時期（特に後期）と推測する。⑲は故城の東北約四・八kmの平台墓地（MA）、同六・九kmの孤台墓地（MB、スタインのLC遺址）の古墓群に関する發掘報告で、前者では、七座發掘し、隨葬品と炭素

14の測定値(2040±90年)より前漢晩期から後漢初期のもの¹⁴⁾と推測。後者ではスタイン未発掘の大型合葬墓一座(MB1)と既発掘墓一座(MB2)を発掘し、MB2の豊富な随葬品とMB1の炭素14の測定値(1880±80年)から後漢前期に相当すると推測する。¹⁵⁾は故城内で発掘した糜と裸大麦の種子、東北郊外仏塔の甬道牆壁から発掘した小麦の穂と裸大麦の種子について四川農學院の鑑定をもとに報告し、前者は前涼末、三七六年前後の故城廃棄時の殘留物、後者は西晋から前涼時期の仏教流伝期に仏塔建造の際含まれたものとする。このように、発掘報告とそれに基づいた分析が加えられており、樓蘭研究にとって貴重な報告である。しかし、¹⁸⁾・¹⁹⁾はあくまで簡報であって、¹³⁾・¹⁷⁾・²⁰⁾により詳しい表現が見られる場合もあり、分析については¹³⁾と共通する、あるいは¹³⁾に基づく部分が多い。

¹³⁾は、調査成果と出土漢文書を駆使して樓蘭城の發展と衰退について分析した好篇で、著者の樓蘭研究の核心をなす。故城内の建築遺址について、官署(三間房)西の大宅院は比較的早期の建築で、仏塔は相対的に晩期の建築で旧遺址の上に新たに築かれ、官署は更に遅く、郊外の烽燧台は内部の版築が漢代で外部が官署と同時期の魏晋期にかかることなどを指摘。その上で、樓蘭遺址は遠古からこの

地区の人類の活動拠点であり、前漢晩期から後漢期には漢朝の屯墾の要地となり、魏晋期が繁栄した時期で西域長史の駐屯地であったが、その後、孔雀河の東南への改道により水源が枯渇したため、樓蘭城は廃棄され、前涼時期に西域長史府は海頭(LK遺址)に遷された、と結論づける。故城を前漢晩期から魏晋期にかけての屯墾地として論じ、出土文書により水源の枯渇を論じて廃棄に結びつけた点に著者の新機軸があり、調査成果に基づく故城の性格分析や出土文書の理解などは示唆に富む。しかし、その一方、出土文書をもとに、一斗二升から六升までの食料支給額の減少とダムによる貯水池の建設が水源の枯渇を物語り、紀年文書最後の建興十八年(三三〇)以後、樓蘭城が廃棄されるに至ったとするのは拙速に過ぎるように思われる。¹⁷⁾そして何よりも、他の論稿にも共通するが、鄯善王都の南遷や紀年文書最後の年以後まもなく故城が廃棄されたこと、王国維氏の樓蘭と海頭とは異なるという見解などを疑う余地の無い大前提としている点(但し、王氏の海頭をLA遺址とする点は否定)に問題があろうし、ここに研究の一つの限界があるように思われる。

¹⁶⁾は、¹³⁾をうけて、孔雀河の改道による水源枯渇のため樓蘭城が廃棄されたことを強調した上で、李柏文書は三四年か、その後まもなくして書写されたものだから樓蘭城

衰廃後のことであり、東南へ改道した河流はLK遺址付近で牢蘭海（カラコシュンを指すとする）北端に注ぎ、LK遺址は海頭の名に相応しい、よって李柏文書の出土地はLK遺址にほかならないとする。海頭の名の由来については示唆される点も少なくないが、他の部分には前提に問題があるように思われ、賛同しかねる。また、Old Text文書をもとに耕地の〇・一八％（一〇・八％の誤り）しか灌漑できなかったとし、⑬での水源枯渇を補強しているが、同文書の理解には無理がある。

⑭は新出土漢文文書六十五件を、釈官、釈地、簿書、名籍、屯戍、稟給、器物、売買、雜積、紙文書に分けて釈読・整理して、旧出土文書と合わせながら分析し、その中で、屯戍の一般的活動のほかに、売買活動を行ない、奴婢の売買や租田が見られたことを指摘する。釈読・分析の細部には若干疑問な点もあるが、初の釈読として貴重な成果であり、待望の新出土文書の丁寧な釈読・紹介に対して敬意を表したい。但し、屯戍を管理する西域長史とともに軍隊を統帥する都督（督）が置かれていたとするが、推測の域を出ないし、都督と督を同一視するなど疑問も残り、楼蘭屯戍の構成などに対する配慮に若干欠けるように思われる。また、細かいことではあるが、統計表では紀年文書の上下限を泰始二年と五年とするが（⑬では泰始二年一件、

四年二件、五年一件）、釈文を見る限り、四年三件、不明（二年か）一件である。

ともかく、以上の報告や研究は、今後の楼蘭研究の基礎資料として非常に貴重である。それだけに、論稿間に数値等の齟齬が見られる（例えば、⑬と⑭で故城の城壁の版築層の数と厚さが異なり、故城廃棄の時期も⑬・⑭などと⑮では異なる）のが惜しまれる。⑬や⑭もあくまで簡報なので、筆者を中心とする正式の発掘報告書の刊行が期待される所以である。

（四）

以上、高昌に関する部分と楼蘭に関する部分に分けて紹介してきたが、実際に調査にたずさわった者ならではの理解と自信が両者に共通して感じられ、示唆される点が少なくない。ただ、出土文書史料の理解に思い込みがまま先行する点が見られることと、用いた史料の性格にもよるが、中国王朝の支配に力点が置かれ、居住する人々への視点に欠ける点が懸念される。

次に今日の研究状況に照してみると、高昌については、著者をはじめとする内外研究者の努力等をもとにしなから、既に高い水準に達しており、著者の研究はすでにのりこえられつつあるといつてよからう。一方、楼蘭について

は、調査報告自体が貴重な資料として高い価値を持つと共に、研究自体も現段階での一つの到達点を示し、今後の研究の出発点になるといえる。

先述したように著者はトゥルファンと楼蘭の両遺跡に関して、調査にたずさわると同時に専論を発表している数少ない研究者である。それだけに両者を総括しうるような視点の提出が望まれるところである。更に、内陸アジア史の展開の中に位置付けていく必要がある。それは、今後の著者の課題であるとともに我々の今後の課題でもある。

註

(1) 本書巻末の著者の論著目録(作者一九八〇年以来主要論著簡目)は、關尾が所属する吐魯番出土文物研究会の作成にかかる「侯燦先生主要著作目録」(『吐魯番出土文物研究会会報』第五号、一九八九年)との異同が目立つが、初出年は前者に依拠した。

(2) ⑦の問題点については、關尾「吐魯番文書にみえる四・五世紀の元号再論」(『吐魯番出土文物研究会会報』第二三、三三、四三号、一九八九、九〇年)を参照されたい。

(3) この点については、荒川正晴「麹氏高昌国における郡県制の性格をめぐって」(『史学雑誌』第九五編第三

号、一九八六年)参照。

(4) 大幅な増補であるが、むしろ原型の「從考古考察と調査論楼蘭城市の發展及其環境変遷」(『新疆社会科学研究』一九八二年第七期)の補訂に近い。また、「楼蘭考古文化研究」(『新疆古代民族文化論集』新疆大学出版社、一九九〇年)は、部分的省略があるのを除けば、ほぼ同内容である。

(5) なお、長澤和俊『楼蘭古城にたたずんで』(朝日新聞社、一九八九年)は⑦をもとに西隊の活動を紹介しているが、誤解と誤訳が多い。

(6) 詳しい内容と他の文献との照合等は、伊藤「楼蘭の遺跡——近年の楼蘭調査によせて——」(『大阪教育大学紀要 第II部門』第三八巻第二号、一九八九年)参照。

(7) 詳しくは伊藤「魏晋期楼蘭屯戌における水利開発と農業活動——魏晋期楼蘭屯戌の基礎的整理(三)——」(大阪教育大『歴史研究』第二八号、一九九一年)参照。

(8) 李柏文書の出土地について、著者にはほかに、孟凡人「李柏文書出土于LK遺址說質疑」(『考古与文物』一九八三年第三期)を批判した「李柏文書出土于LK析疑——兼与孟凡人同志商榷」(奚国金氏と共著、『考古与文物』一九八五年第三期)がある。しかし、橘瑞超の足跡から考察した片山章雄氏(「李柏文書の出土地」『中国

古代の法と社会 栗原益男先生古稀記念論集』汲古書院、一九八八年)や、文書史料や発掘報告書などから多角的に論じた孟凡人氏(論李柏文書の年代和出土地点)、『中国歴史博物館館刊』総第一三・一四期、一九八九年、『楼蘭新史』(光明日報出版社・霍蘭德出版有限公司、一九九〇年)らのL A説の方が説得力があるように思われる。

(9) なお、田中有「楼蘭新出土の木簡と残紙」(『書品』第二九八号、一九八九年)は⑭をもとに新出文書を紹介する。

(新疆人民出版社、一九九〇年七月刊、A5版、八十三・一三・五八・三六頁)

隠された中国イスラム教の秘密資料

——『ラシユフ』

張 承 志

中国のイスラム教は一〇個の民族の間に広がり、一五〇〇万の人口を擁するが、その中の一つである回族は七〇〇

万の人口を持っている。近代に入ってからこの回族は中国社会の中で注目を集める存在になっており、近年いっそう研究が進んでいる。

中国イスラム(回教)の中には様々な教派がある。もっとも簡単に総括すれば、三つに分類される。まず、唐—元時代から古い伝統儀礼を持つ派がカディーム(古典の意味)と呼ばれる。次に、アラビア半島に起こったワッハーブ宗教運動の影響をうけて中国で盛んになってきた原理主義教派がイフワーニー(兄弟の意味)と名づけられる。その他、多数のイスラム神秘主義すなわちスーフィズムと認められる教派が存在する。

スーフィズムすなわちイスラム神秘主義教派を信ずる中国回族は、百万人くらいにのぼると思われる。それらはクブラウィーヤ、カーディリーヤ、フフイーヤ、ジャフリーヤの四つの系統になるが、細かく数えると何十もの分派も認められる。中国イスラムの中心地域は歴史的にいっても甘肅(清末の甘肅には今の寧夏と青海東部をも含めるので、ここでは旧甘肅の意味で使う)、新疆、雲南の三つの地域であるから、スーフィズム各教派もこの三つの地域に集中して、そこから全国に影響をもたらしている。